

昭和
和

二十四
年
四十七
年

七月
二十
三日
十五日

第三
行
(種
郵便
物認
可
毎月
一回
・十
五日
發行)

(通第二七八号)

次

近角常音先生御法話……………大字 三右エ門……………(1)

浄土の慈悲……………山本晋道……………(6)

心の落書……………信国精一……………(12)

念仏詩抄……………木村無相……………(14)

人間の原点を求めて……………花田正夫……………(17)

ともしび……………聚墨生……………(22)

目

慈光

第二十四卷

第七号

近角常音先生御法話

大字 三右エ門(記)

昭和二十六年十月西源寺報恩講。

先程御伝鈔を拝読しましたが、聖人御一代の御苦勞は少々容易な御事ではないのであり、御恩徳を深く覚えませう。

聖人のお書物も、これを筋だけ頂くのでは、各々の身にびつたりと頂かして貰うようにはならぬと思われませう。これは私自身が永年の間、仏様の話を聴きながら、有難いとは申しながら、なかなかはつきりしなかったもので、それ故今夜はそのところを聞いて頂くと思うのであります。

エ……如来大悲とありますが、この仏の御恩徳を思わせて頂く方はよくわかる。これと同様に師主知識の恩徳も骨を砕きても謝すべしと仰せられてあります、この後の方の御文意がびつたり分らせて頂けぬのであります。

私は二十七、八歳の頃から、仏様の御恩の方は分らせて貰っている気持はするのですが、毎年こうして江州へ帰って報恩講を勤めさせて頂くが、師主知識の聖人の御恩徳の方が軽く思えて、骨を砕きても謝すべしとあるのが、私

の胸によく納らぬ思いがずっとありました。これは私の懺悔話故よくお聴きとり願いたいののであります。

勿論、聖人の御恩徳の上に如来の御恩徳が加わる。それゆえ、即ち如来大悲の御恩さえ有難く頂いて居れば、聖人の御恩をそれほどまでに思わせて頂くということが、どうにもびつたりと胸にこない。そのところを詳しくお話してみたいと思っております。

ここで私の兄貴のことを申し上げます。毎度お聞き頂きます通りで、兄貴が私を心配して、蔭で愚痴をこぼしているそれ程までに私の我慢のやまぬことを心配している。

「彼奴の何時までたっても我慢のやまぬのには困ったものだ、可哀想なものだ」

と、遂には人に愚痴をこぼしている。これを私に告げたのは嫂(あね)である。只何気なしに、茶話に私に告げたのであるけれど、この愚痴話を私に話してくれる人がなけ

れば私に聞けない、私に届かないのであります。嫂は今故人になってるが、私にしてみれば、この嫂という人は只人(ただびと)でない。有縁の善知識と云わんか、これは只事に思えないのであります。

ア……唯円坊が歎異抄を書き残して置いて下された。これが私共が今日仏様の大悲を聞かせて貰うのにどれだけ御縁になっているかわからぬと思わせて貰うのであります。唯円坊という方が無かったならば吾々は親鸞聖人の信仰のことを聞くことが到底出来なかったのではないかと思わせて頂くのであります。

しかし当時、私の兄貴というものは私に信心を説き聞かせてくれた善知識であるが、善知識とは信心を頂く手引をしてくれるもの、それだけのものである、そういう気持がしていました。肝要なことは仏様のお慈悲というもので、広大な大悲が有難いのであって、その仏様へ、そのお慈悲を頂くために兄貴は手引してくれただけのもので、誤解をこうむる云い方ではありますかなれども、兄貴が即ち仏とはどうにも思えなかったのであります。

ここで以前にもおきき頂いたことがあります、求道会館のことを申します。これは兄貴の存命中のことで、或年の報恩講を勤めさせて頂いた時のことであります、その頃兄貴は病氣して居りました故、日曜講話も二十分も続

けてお話が出来ぬ状態、それゆえ、兄貴のお話の後を私が代ってお話してしました。

ところで、その時、私の思いますに明日は年一回の報恩講であるが、それは私の心にびつたりときていませぬ。如来様の御恩のことはわかるも、聖人をそれほど有難く思わぬ訳ではないが、如来様同様に有難いとはどうしても思えないのであります。

「仏様が御座らぬと救われない。その仏様同様に、師主といえますから善知識の御恩も同様に頂かねばならぬとあるけれども、そのように思えませぬ」

これは屁理屈というものであります。さて、その時、明日は何をお話して聞いて頂くかと机の前でいろいろと思っているうちに気がつきましたことは自分は一角、仏様のこと、お慈悲のことを気づかして頂いたかの如く思っているが、これは一体誰から聞かせて貰ったのであるか、と考えてみますと、元来私というものは、子供の時から兄貴と一緒に暮してきたもので、他所の話を聞いたことがあります。ほとんど兄貴の話だけしか聞いて居らぬ。仏様から、直(じ)かづけでなくして、兄貴から聞かせてくれたためであって、その兄貴が居なければ、ほとんど仏様のことを分らせて貰うことが出来なかったで

あろう。一から十まで、ことごとく兄貴から頂いたものばかりである。エ……私共の話では、何処々々々でもあきれぬお慈悲と申しています。この言葉は他所では使ひませぬ。この何処々々々々でもというのは江州の言葉であります。又、私共の方は、おあきれないお慈悲と申しているが、これは誰が言い出したかと申しますと、これも兄貴が苦しんでいる間に考へついた言葉であります。

皆様もご存じの通り、私の兄貴は何とか善い人間にならねばならぬ、人にあきらめられてはいかぬと考える余りに、これで兄貴は苦しみ悩んだのであります。

色々やったのでありますけれども、どうしてもよくすることが出来ず、出来ぬだけにおさら済まぬことだ、申訳ないこととなり、益々他の人に対して心持がへだててしまふたのであります。

遂に、何としても善くすることの出来ぬ自分は仕様がなと思うていたのに、その善くなれぬ、仕様のない者に仏様は、それが可哀想と仰せあったのか、そういうお慈悲であつたかと思わせて頂いて、かくして兄貴は安心させていだいたのであります。

その兄貴の話ばかり聞かせて貰つていた私は、信心も、言葉も、かく皆様に申している一言々々も、兄貴からの貰いものであつたのに、私はこのことが永年わからせて貰え

もちける身に於けるを助けんと思ひましたちける本願のかたじけなさよ」とあるが、このお言葉を承わつて、この御述べ懐というものは血涙の御仰せであると思わせて頂きます。これはなかなか言いつくせませぬ。

「親鸞一人」ということは、聖人御自身、お一人のことである。三世十方の皆並（みななみ）のものとは一言も仰せられて居らぬ。自分も頂くから人も聞け、世界中の人も聞け、このお慈悲だけは間違いないなどと仰せられたことはお一言もない。歎異抄二章に「愚身の信心におきてはかくの如し、このうへは念仏を信じたてまつらんとまた捨てんととも面々の御計いなり」と、最後のとどめのところに明瞭に仰せられてあります。これは聖人が各々勝手にしなさいと仰言つたことは無情な仰せの様にみられるけれども、無情に以た言葉であるがそうでない。吾々片輪者であるにつけて、その片輪が問題なのであつて、こここのところをよく気をつけねばならぬのであります。

聖人御自身にしてみられると、そくばくの業をもつた片輪なるにつけて、この親鸞を可哀想と呼びかけて下され、捨てぬとお慈悲である。この恩師法然上人の御一言を思へば、即ちそくばくの業を持ちける身に於けるをたすけんと思ひましたちける本願のかたじけなさよ。これを明けても暮れても何時も仰せられていたのであろう。

なかつたのであります。よく丸貰いという言葉聞きませんが、私の信心は兄貴から丸貰いであつたわけでありすが、私はこうして皆様に信心のお話を聞いて頂いていますが、そのお話をうまう、上手にお話申すことの出来ぬ故、この点は苦勞をいたしますけれど、しかし信心のことには苦勞いたしません。これは兄貴の申していた通り、そのままを私も申上げて居つて間違いないのであります。

この様に兄貴の手引で仏様からお慈悲頂いたと思つていたのは大間違いであつて、御信心そのものの悉く私にくれていたのである。手引の恩ぐらいに思つていたのは、忘恩背徳のいたりで、永い間、なんのかんのと思つていたことが忘恩だつたと分らせて頂いた。善知識から丸々貰つていたのである。善知識とはこういうものであつたと分らせて頂いたのであります。

親鸞聖人は彼土から広大の御信心をもつてわざわざこの世へ持つて来て下されたのであります。聖人ほど信心と日常の生活とが板一枚の様になつて吾々にお知らせ下さるがこんなお方は他に無いのであります。

御流罪の難儀であつたことは容易の御事ではあらせられなかつたであらうと拝察申されます。それにつけても歎異抄の常の仰せ「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり、さればそくばくの業を

よく人の申すには、聖人はおえらい方だから仏様の様の方だから、吾々のように腹を立てなさるなどなされなかつただろう、などと思うのは大きなあやまりと申すべきで聖人も吾々と寸分違わぬ罪業の御身であられたわけでありすが、それを聖人は、わが御身に引合はされて、自分一人だけは片輪者である、人のことではない。われ一人は罪深い業人なるにつけて、この親鸞を捨てぬとの仏の仰せである。それゆゑ、どんなことがあつても仏様だけは離されたい、お見捨てない広大の御恩徳であると頂きなされたのであります。

われわれ御同様も、どれだけの業報があるやもわからぬのであります。ア……日常生活において、病氣もする、明日のことどうなるやら、ひっくり返ることのないとは申せませぬ。またあべこべによくなくなつてくるといふ具合に、現にこの世は無常である。死ぬということだけでない、財産がどうかなることも無いとは云えない。東条さんの如くなることもある。国家の現今の有様は容易でない、浮き沈み常でない、隣国朝鮮で沢山の人が死ぬ、ひどいことが現実におこつてゐる。これが「そくばくの業」であります。それ故「そくばくの業を持ちける身に於けるをたすけんと思ひましたちける本願のかたじけなさよ」との仰せである。聖人はこのお慈悲一つで立つて居られた、生きておい

でになったものと思わせて頂くのであります。

次に機法二種の深信のことをお聞き願おうと思ひます。

吾々というものは罪業の身の上のものであります。罪惡深重の身ということ、これはどれだけ申しても云いつくせぬのであります。この罪業を自覚しても悪しきは減少しませぬ。これは考えちがいをしてはなりません。自分に善くなかった、悪かったと気がついてはそれで人間はよくなったのではないのであります。

野々村直太郎

いらぬ話なれども思ひ出したので申してみます。野々村に在学中すでに信仰を求めて福岡の七里和上にも聞きに行つた程の人ですが、その人の云うには「機法二種深信とあるが、あれは矛盾していると思う。機の深信は、自身は現にこれ罪惡生死の凡夫、曠劫よりこの方常に沈み、常に流転して出離の縁あることなき身と深信する。即ち罪の深い者でたすからぬと云つてあるのに、一方の法の深信では、彼の阿弥陀仏の本願に乗托して往生すると深信する即ち罪の深い者をたすけるといわれている。これは明らかに矛盾である」と云いたてられた。

それは野々村氏の云う通り普通の常識ではその通りであるけれども、助かりようのない者が助かるということは、その間に、仏智不思議のましますことをどうしたことかこ

浄土の慈悲

— いそぎ彼土へ参りて —

山本晋道

愛の行き詰り

人を育てるということはむづかしいことである。むづかしいというよりもむしろ不可能に近いと言つた方がいいかも知れない。何とかして美しく正しく幸せにしてあげたいと色々やってみるが、なかなかうまく行かない。人のことを世話してうまく行かないくらいではない。自分の生んだ子供がなかなか自分の思うようにならない。

これは何としても残念なことである。真心こめてしてやうっていることが、思うような結果を生じないということほどよくやしいことはない。こちらが心をこめてるときほど裏切られることはつらい。これがわからぬのかと泣いて相手を責めなくなる。それでもきかずにまちがった歩みをつづける時には、勝手にせよと投げ出したくなる。そうしてみても、私も落ちつかず、相手も悲しい道を歩きつづけて行く。亡びゆくその姿を見ることがまことにつら

の人が取落しているためにこういうことを云うのであつて罪の深い者がたすからぬのでは何ともしてみようのないのであるが、その罪深い、たすからぬ、仕様のない者をたすけたいばかりに、本願力不思議、本来あり得べきでない広大のおまことが現れてお救い下さると仰せあるのであつて、ここに仏智不思議の誓願ということをよく注意して頂かねばならぬのであります。

私の兄貴は永年病氣して最後の頃は全く力無いものとなつてしまいました。遂には頭が重い、悪いと申してしました。病氣は中風で、永いこと思っている間に色々の器管が弱つてまいります。頭だけ弱らぬということは無理である。私は氣になるなれば薬を飲みなさいと云うと、兄貴はいやな顔をします。医師に相談の結果、とうとういやな顔をしなから鎮静剤を飲み出しました。

兄貴は病中、他の病人と同様に寸分違わなかった。真宗信者だから、お慈悲を喜んでいたら、死に際も念仏称えて安らかに往生せねばならぬではたまったものでない。兄貴は凡夫のありさまのままでチョツとも殊勝ぶつた所がなかった。凡俗のままで、立派でない兄貴の姿は、聖人のお言葉と同じでした。私の兄貴は、大慈大悲の只ならぬことを最後の最後まで身をもって化導してくれました、何より有難く思わせて頂く次第であります。

い。他人なら、べそをかくまで見ていてやれと言うても居れようが、切つても切れぬ親であり子である場合等にはそうは行かぬ。よし他人でもこちらに捨てきれぬ未練がある時にはそうは行かぬ。さりとて、いくらあせつても、責めても、ほうり出しても、こちらの悩みの始末はつかぬ。こんな時私共はどうしたらよいのであろうか。

親鸞聖人の御心持

歎異抄、第四条には、聖人の御言葉として、次のような深刻無比な述懐が記録されている。

慈悲に聖道・浄土のかわりめあり。聖道の慈悲というはものをあわれみかなしみはくむなり。しかれども思うがごとくたすけとぐることきわめてありがたし。また浄土の慈悲というは念仏していそぎ仏になりて大慈大悲心をもて思うがごとく衆生を利益するをいうべきなり。今生にいかにおしふびんと思ふとも存知のごとくた

すけ難ければ、この慈悲始終なし。しかれば念仏もうすのみぞ末徹りたる大慈悲心にて候うべきと、云々。

これは聖人の対人態度の腹の据わりである。この考え方で深められた上で人に対するのでないと、私共の愛はきつと行きづまる。人に親切をつくすとか、愛し育てるとか言うけれども、人生のことは結局は不徹底である。真面目に考え、相手に対する愛が深まれば深まるほど、不満足と不徹底と、行き詰りに悩むのが人生のおちである。そして親切と云い、愛というけれども、亡びつつある者を亡び行く迷いの世界においたままでつくしてあげる愛は愛とは言えない。愛が純粹となり、本格的に深められたなら、その愛は亡びの世界にあつて世話することだけでなくて、亡びゆく世界から救いの世界まで、迷いから悟りへ、流転輪廻(るてりんね)の方から、往生成仏の歩みへと彼の方を転回せしめんとする心までにならねば本当であるまい。これを仏教では慈悲という。

今この四条で、慈悲に二つあるといわれているものは、その純愛であり、本当の情を云っているのである。こうなるといよいよ我々は人間の力に限りあることを知り、否むしろ、この問題の前に立って、人間は遂に何の力もないことを悲泣するより外に道はない。

「人間は遂に人間を救うことが出来ない」これは寂しい

道ということである。

聖者の道に憧れて、幼い頃から叡山に登り、あらゆる学問修業に精進された親鸞聖人は、遂に自力の努力では救われ難いことに気づかれて、法然上人のお導きによって他力浄土の一門に帰入せられたのであった。そこに人間の力というものに徹底的な反省をお持ちになった聖人は、仏教の本格的な生き方である慈悲ということについても、聖道門の行き方では決して徹底した慈悲を成就することは出来ぬことを知り抜いて居られた。

自らに力ありとして生きて行こうとする人と、自ら何の力も無いから仏さまのお力をたよりとして生きて行くのであると腹を据えている人とは、自分に対する態度にも人に対する態度にもまるで異なった風格のあるべきは当然である。この点を腹に持ちてこの第四条に対すると、聖道の慈悲の末通らずと歎息し浄土の慈悲を聞いて心から微笑して、凡夫の力では遂に解決せぬ幾多の地上の謎を抱えながら力強く生き抜いて行かれる道がひらかれるのである。

聖道の慈悲

さて聖道の慈悲とはどんなものであろうか。これは「ものをあわれみ、かなしみ、はぐくむ」ことである。「もの」とは衆生ということである。その衆生の苦悩をわが苦悩として、これをあわれんで、苦しみの因をとりわけ、案

ことであるが、はっきりした事実である。溺れつつあるものは、遂に、溺れるものを救う力はない。迷い行く自分一人の始末すらつけ得ない人間が、どうして他人を救い得よう。このことを我々はとくと腹の底に持った上で、人に対して行くのではないと、柄でもないことにうぬぼれて、救う積りで相手を傷つけ、自らも傷つく。そして結局は末通らぬ凡夫の愛にもつれ合いながら、末通る仏の大悲を仰ぎ、これにたよることを我も人も忘れて亡びて行かねばならない。不完全なものにのみ眼をつけ力んでいるために、恵まれている完全な仏の救いをこぼむことは悲しい輪廻の因となる。ここに示された第四条には、この一点をはっきりと鋭くつきつめ、その解決の道のありかを明らかに指示して下されているのである。

聖道門と浄土門

さて聖道の慈悲とは何をさすか。聖道と浄土とは釈尊一代の教えを分別するものさしである。聖道とは聖道門ということで、聖者のたどり行く悟りの道ということで、自分の力で真理をつきつめて、この現身のままで仏の悟りに達し、この穢れた現世をそのままでお浄土に見直して行く生き方である。浄土とは、浄土門ということで、これは力なくおろかであさましい自分の上に仏のお力を頂いて、仏の浄土に往生し、そこで悟りを開いて仏とならせていただく

しい生活を与えてやるために、これを仏の悟りにまで育てあげて行くということである。迷い汚れ苦しんでいるものを見て、わが事のように心痛めて、明るい、淨い、楽しい真実の生活者となるまで彼をそだてあげるということである。これは、とても私共に来ることではない。その人の迷いの闇は深く、これを照らすべき私の智慧の眼はあいていない。その悪業の根は深く、私の力には限りがある。その人の苦悩は複雑であり、私はわかるだけしか同情もし得ないし、慰めることも出来ない。限りなき業道を亡び行く者を、限りある力で助けとげるといふことは、とても出来ることではない。

相対流転の世界に住む身には、所詮、人も我もはてしない生死の苦海に沈没している。溺れているものが抱きあげてあげたつもりでも、抱きつ抱かれつ溺れて流されて行くに過ぎぬのではあるまいか。なるほど貧苦に悩む人に金を与えて救うことは出来るかも知れぬ。しかし貧苦から救ってあげたからと云って、その人は決して完全な救いの中には居ない。複雑な人生の苦しみは、次から次と押しよせて依然として苦悩の因はなくならぬ。もっと皮肉に言えば、貧しき時、緊張して相和していた夫婦が、財産が出来て後に、離縁せねばならぬような人もある。病んで泣いている時もつらかったが、健康になって煩惱の始末にこまってしまう

びて行った人もある。末通った善惡の判断のつかぬ私共が目先だけの判断で親切のつもりでやっていることがはたして善になっているのやら、お浄土から悟りの眼で振りかえってしらべてみたら、悪と思つてやっていることだけが恐ろしいことでなくて、善いつもりでやっている地獄の因が、この世のなしわざの中にどれほどあるか知れたものではあるまい。

ことに我々は、あさましいことをする時には、心がとがめられているので多少のブレーキが内からかかってくる。けれども善いこととしていとうぬぼれて、のぼせてやり出した時には、とめどがない。善に酔うて反省を忘れてやり出した時に、しでかしつつある間違いは、どんな大事にまでも發展する。

そしてまた、そんな時ほど自分の親切が届かぬと腹を立てる。うまく行けば恩をきせる。いずれになつても足の浮いた凡夫の親切や同情は危い結果を生じ易い。

雑毒の善

その上に、愛だとか、親切だとか、はっきり云つてはいけるけれども、人間の愛はなかなかあやしいものである。本当に相手を生かしたいのか、自分のために愛しているのか、そこをつきつめたら、大抵愛な心が奥にひそんでいるのではない。美しい愛とか、同情とかの名にかくれて、

浄土の慈悲

それでは私共は、この行き詰りを抱えて、どう生きて行けばよいだろうか。凡夫の愛と親切にみかぎりをつけて、果然と手を拱いて眺めて居るのであるか。親鸞聖人は、人間の愛の価値を懷疑し否定して居られるのであろうか。所詮、人間は人間を愛することも育てることも、救うことも出来ぬのだと絶望したままでじつとして居られるものであろうか。断じてそうではない。

聖人九十年、倦むことなき御活動を思うとき、蓮師八十年の粉骨碎身の御精進を思う時に、そこに何か滾々として湧き出る生命の泉がある。静かに底光りのする力強い信念が動いている。それは何処から来たものであろうか。

我々はこれを聖人御自身のお言葉に聞こう。

「また、浄土の慈悲というは念仏していそぎ仏になりて大慈大悲心をもて思うがごとく衆生を利益するをいうべきなり」

ここにはっきり、聖人の心の解決が示されている。聖道の慈悲の深刻な行き詰りがあればこそ、はじめて知らしめられるうれしい浄土の慈悲がある。浄土門は念仏往生の道である。この世では、如来の名号を聞信して念仏に生かされし時、間違ひなく往生させて頂く身に定まる。そして往生するとは直ちに仏になるといふことである。仏のお力を

己を利せんとする心がともすれば動いているのではないか。自己満足のための愛であり、同情であることが多くはないか。又かりに利己心を含まぬ淨い心からの親切であつたとしてもその親切がはたして末通るか。愛に徹する事が出来るか。背に腹はかえられぬと切羽つまつてくると自分のために人のことはかまつて居られなくなるのではないか。

かくの如く考えてくると、さみしいことではあるが、我の力には限りがあり、智慧には限りあり、真心には限りがあつて、一として末通ったことは出来ぬ私共ではないか。ことに相手を導いて、闇と罪と苦しみを越え仏にまで育てるなどということは、とても及びもつかぬことである。いい加減に世話をしてやつて、それで恩着せて居られるような人はよいとして、相手と思う心が深まれば深まるほど、私共は聖道の慈悲の末通らないことに、はたと行き悩むほかはないのではあるまいか。

「思うがごとくたすけ遂ぐることを極めてありがたし」、
「今生いかにいとおしふびんと思うとも存知の如くたすけがたければこの慈悲始終なし」

とうなだれて居られる悲痛なお心持は愛せんとする心が本格的で深刻であればある程わからせて頂ける氣がする。

私も頂くということである。

仏とは限りなき智慧であり、力であり、慈悲である。その智慧をもつて、迷える衆生の闇を破り、その力もて、一切群生を荷負（かふ）しておのが重担となす。成仏した上からは、直ちに生死の園に還来して、還相摂化（けんそうせつけ）の限りなき大活躍に入らしめられてこそ、初めて末通る慈悲が行せられるわけである。

何事もままにならぬが人の世である。ままならぬ世をままならぬと泣きながらうけとめて越えて行ける無碍の道は「念仏していそぎ彼土にまいりて仏になつてこそ」と信嘗して下さる聖人の仰せにひらかれてくる、ままになるような夢は見まい。ままにならせてみせるぞと、末通りもせぬ誇りは持つまい。所詮、人の世でままになることは一つもない。なければこそ、行手に浄土は建立され、私が仏になるべき因を求めない先からめぐまれたのである。

この往生成仏の因をはっきりといただく。そして聖道の慈悲の末通らぬことに、はたと行き詰つて悩むとき、静かに念仏して浄土をおもう。そしてやがて開いて下さる還相摂化の大活動をおもう。そこに、六道、四生いずれの業苦に沈んで居ろうとも、天眼通をもつてこれを見出し、天耳通をもつてその声を聞き、神足通をもつて走せつけ、必ず一度は浄土に迎えられるまで、働きかけて、育みつづけて

倦むことなく、たゆむこともしない。あゝ、この喜び、この行手がめぐまれてあればこそ、ままならぬ世は、深きため息をつきながら、ほっと念仏せしめられて元気に立ちあがれるのではないか。

いそぎ仏になりて

「念仏していそぎ仏になりて」と仰せられた「いそぎ」の三字にやるせない聖人のお胸が味わわれる。八十余歳にして聖人は、その長男、慈信房善鸞を義絶せねばならなかった。六十歳にして関東で生別せられた奥方恵信尼公とは遂に三十年相見ることなく御往生にならねばならなかった。また末娘の覚信尼さまの京都での御苦労も、聖人のお力では何ともならなかった。九十年の波瀾万丈の御生涯にはさぞや悲痛な出来事が多かったことであろう。けれども、聖人は決してそれで行き詰ったり、あわてたりはなさらなかった、ひがんだり、やけになったりはせられなかった。

常に沈痛に、しかも力強くお念仏一つに生き抜かれた。困苦いよいよ加わった八十歳より九十歳までの間に、聖人の法喜はいよいよようるわしく、多くの御著述を残して、限りない仏徳を讃仰し、愚禿の身を悲泣して居られる。この無碍の力は何処から来たのか。

これこそ入正定聚（にゆうしようじゆ）の益であ

る。本願の念仏を信受した人の力強さである。そして、この世で何ともならぬ涙の因を抱えて悩めばこそ「念仏していそぎ彼土にまいりて」と希望と確信に燃えて、いよいよ念仏せられたからである。この世で解決せねばこそ「いそぎ」まいりてである。私はこのいそぎの三字に聖人の悲痛なる御心持を感じると共に不退転の生命道に立てる人の底深く湧き出する喜びと力とを感ぜずには居れない。

無碍道

流転の旅路には本当に解決のつくことは一つもない。忍ばねば生きられぬからこそ娑婆と名づく聞く。

忍び抜く力は大悲を聞信して念仏する一つである。そしてこの念仏の一步一步が一切が解決するお浄土へ間違いない迎えられる行く相であることを信知することである。

碍りあるまんま、碍りを負うて力強く生きる道、この無碍道は念仏者のものである。この道に立った時、はじめて行き詰れる地上の愛に悩みつつ、私共は力強く生きさせていただく。彼土へまいらせて下さることによって、未通る大慈悲が私のものになるから、徹底した仕事は一切それからである。だから「念仏もうすのみぞ末通るたる大慈悲心にて候うべきなり」である。

（昭和十五年六月、稿）

心の落書

信 国 精 一

三経のみこころ

大経は仏々相念不思議なる凡夫往生ひとすじの道

観経の中にあらわる逆謗は精一のこととおしえ下さる

うたがいに惑う我が身に小経は十方諸仏の証誠護念

墮ち機

墮ち機とは名号聞えて知れること墮ちるおちぬは要のなきこと

お六字を聞きもせずしてわが胸をオチルオチヌと懦慢の角

よろこび

照らされていよいよ深し執われの心たえぬを離さぬ大悲

一息の生命尊し病みの身を摂取の御名にまかせまつりて

昭和四十五年四月、突然の発熱四十度になり、宇和島市立病院で腎臓切開、人工尿道手術をうけ、その苦しい病床の中で大悲の深いみこころと、有縁の同朋の温情に支えられて生かされてまいりました。その時の心情を記しました

昭和四十六年八月。

凡夫のかなしみ

今日も又人の死したること聞くと驚きもせで生きておる我大きな後生の大事あとにして小さな諍い今日も過ぎける

凡夫とはかくも悲しき性なるか煩惱はげし昨日も今日も

願力無窮

悲しみの涙の奥にひびくなり畏るるなよの弥陀の御声は

今日もまた愚かなわが身過ぎにけり大悲の声に導かれつつ

大手 術
有難うと返す力はなけれども心に拝す大医如来よ

法蔵の五兆の苦勞今ここに我が身の業苦の唯中にあり
苦しみに御名呼ぶ声もとぎれ勝ちされど狂わぬ弥陀のおま
こと

御見舞

病む身には人の心の有難くただ掌を合せ涙にくるる

恩師の仰せ

ひたすらに大悲を学ぶ態度こそわが人生の意味と頂け

順逆につけてよくよく頂けよ空ことの身に弥陀のまことを

愚痴が出るいかり腹立ち満ちみてるこの死屍に念仏の出る

法信抄

(四十七年春)

昨年の暮に、過勞のためか眼底出血をおこし、左眼の視
力を失って以来、特に大無量壽經に説かれる「無眼人、無
耳人」の語がありがたく味われる。

平素私共は光りに対してあまりにもなれ過ぎているが、
自分自身が外の光りの世界が閉ざされて、闇の世界が近づ
きつつあることを感ずるとき、念仏の中に、内なる光りを
恵まれていることの喜びがしみじみと思念せられる。

仏法に遇わしていただく者の喜びは、自分のあまりにも
浅ましい無慚無愧の身に、仏の大慈悲が内なる光りとなり
み声となつて、我が身を生かして下さる不思議な仏力を渴
仰申すばかりであります。

業道の計り知られない人間苦悩を除いてその外に如来が
いますのではなく、わが身の三毒の今日の生活の真只中
に、煩惱熾盛の心中に一体に融け入って下さり、この私に
なりきつて憐れみ給う仏智不思議の御はからいの有難さを
ほとりない業苦の涙の中に謝しまつるばかりであります。

「無眼人」正しく真実の光りに照らされた私はめぐらで
あったのだ。浅薄な凡夫の絶対の智見によつて言亡慮絶（
ごんもうりよぜつ）の如来の絶対智見の世界を疑い來った
今が今までの自分の謗法の罪の重きを、本願の大慈のみ声
の中に静かに知らされる時唯々念仏申すの外はない。

真実といい、如来といい、或は信ずると云い、行ずると
云うも、それが人間の手によつて、おのれの手元に引き下
るされ、おのれの味方にせられた時、それははや如来でも
なければ真実でもない。信心という名の概念でしかない。

真実の御親に直面させていただく世界は、私共のはから
いは微塵も役立たぬのである。私の持った信心も、わかっ
たものも、ことごとくひきさき、打ちくだいて下される御
親の大悲こそしみじみただかれるのであります。

念仏詩抄

木村 無相

ナニかいた

ナムアマミダブツと
かきました

早やおたすけ

//ただ念仏して

弥陀をたすけられ

まいらすべし//

おおせのマコトに

うごかされ

おおせのマコトの

うごくまま

念仏出ぬ間（ま）に

早やおたすけ

おおせのもとに

早やおたすけ

いのちの海

大きな

大きな

いのちの

海よ

〃名号フシギの

海水は

逆謗の屍骸も

とどまらず

衆惡の万川

帰しぬれば

功德のうしおに

一味なり〃

大きな
大きな

おねんぶつの

海よ

自然

自然

ああ

今

その息(いき)づかいが

聞こえる

生 き ろ

生 き ろ

生 き ろ

花が花であるように

草が草であるように

生 き ろ

じぶんを尽くして

生 き ろ

生 き ろ

生 き ろ

じぶんを尽くして

生 き ろ

散るときがきたら

散り

枯れるときがきたら

枯れるがよい

生 き ろ

生 き ろ

花のごとくに

草のごとくに

願 人(がん)

願

願

願

願

願

〃罪惡深重

煩惱熾盛の

衆生を

たすけんがための

願にてまします〃

このわたくしを

わたくしを――

安心

〃縦令(じゆりょう) 一生造惡の

衆生引接(いんじょう) のためにとて

称我名字と願じつつ

若不生者(にやくふしようじゃ)と誓いたり〃

お覚悟

お覚悟

如来のお覚悟

〃若不生者

不取正覚〃

如来のお覚悟一つで

往生

如来のお覚悟

いただくばかり

〃あら

心得やすの

安心や!〃

人間の原点を求めて

花 田 正 夫

本夏の黎明講座に「人間の原点」という題で話し合うようにと頼まれたので、早速字引をしらべると、原点とは根源の地点という意味で、本来数学上の術語、一つの平面上に互に交わる二直線を定めて座標をきめて原点とする、とある。その点が定まると、その平面上の他の一切の点や線の位置が定まるのである。

そこで、人間の原点とは、そこが定まることによって、一切の人間の活動の根底となり、方向も定まるのである。例えば、東京に旅しようとする時、先ず現在の自分の居る場所が定まらぬと、東に向ってよいのか、南に行ってよいのか決定のしようがない。ゲエテは「洋服のはじめのボタンを間違えると、終りの始末がつかなくなる」と警告している。ここにまず「現在の自分」を知らねばならぬ。

三千年の昔、ソクラテスがデルフイの神殿に掲げられた言葉「汝自身を知れ」を提唱したのは、この原点を知れと

いう意味で、われらにあたえられた大いなる謎である。我國の徳川家康時代にデカルトは、「われすべてを疑う」ということから出発して、有名な「コギト、エルゴ、ズム」——「われ思う故にわれあり」という自我、疑うにも疑うことの出来ぬ自己の存在に到達し、これが彼の思想の根底になっている。

近世の実存哲学の始祖とも云われるニイチェは、人間の底をついて、虚飾を払って、そこから光をもたらそうとしているが、彼の有名な著書、ツアラストラに

「人間は貝のカキのようなものだ。外面をいかめしい殻で覆っているが、中身は、ドロリとした糞みどころのない、無気味なかたまり、鼻屎汁のようなものである」と云い、又さらに

「君がたが体験し得るもののうちで一番大きいものは何か。それは大いなる蔑視の時だ。君がたの幸福も、理性

も、道徳もすっかり唾棄すべきものになってしまふ！」とも云っている。これらは素裸になって人心の底を探ろうとしている真剣な人々の声である。

さて省みて、自分自身について考えよう。自分のことは自分が一番よく知っているということをよく云うが、はたしてそうであらうか。自分の顔を自分の眼で見得ないように、それは一番至難のことである。釈尊は

「刀はどんなによく切れても刀自身を切ることが出来ず鏡はどんなに立派でも自身を写し得ないように、如何なる智慧者といえども身辺三尺は暗闇である」と

と云われている。私はことに身びいきな心が強く、我執のかたまりの身とて、われかしこし、われよしと思えぬのである。からっぱの稲の穂は何時までたっても頭が下らぬのと同じように、私は幼い時から、よくなれ、かしこくなれ、そして立派になれ、でないと嫌われるぞ、捨てられるぞ、と教えこまれ、自分もその通りと思いこんでいるから、自分が愚者悪人であつてならぬこと、それはとんでもないことで、よくよくの場合に駄目だなあと気づいても、今は駄目でもやがてはよくなれよう、賢くもなれようと、未来の理想の美しい虹の中に自分を包みこんで、美化してしまふのである。

又、無常迅速という問題でも、仏陀は「呼吸の間にあ

り」と誠められ、高僧方は「出る息、引くをまたず」と仰言るけれど、自分は何時まで死なぬつもり、自分にふりかかって来ようなどとはどうしても思えぬのである。大無量寿経の下巻の三毒段に

「生死の常道うたた相い嗣立（じりゅう）す。或は父子を哭し、或は子父を哭す。兄弟、夫婦、たがいに哭泣す顛倒上下、無常根本なり、皆まさに過去すべし、常に保つべからず。教語開導すれどもこれを信するものはすくなし。ここをもつて生死流転、休止あることなし云々」と、無常の世にあたってうかうかと空しく過ぐす私共をみそなわして、やむにやまれぬ大悲の声である。

まこのように、自分で自分の正体を知る力のない身としては、真実の教の鏡に自分をうつして見る外に自分を知る道はない。もとよりその鏡は曇りのない凸凹のないものでなければならぬ、人間の目にうつるものは、矢張り曇りと不平等さをまぬかれない。そこに智慧限りなく、慈悲の極みのない、大円明鏡と讃えられる仏陀の心にうつる私共の姿に正しい私共の姿を見出すことが出来る。教を攬（と）って心を照らすとは古人のよく選んだ道であった。

先ず法華経によって私共の姿を省みよう。有名な「火宅

三車の譬」がある。崩れかかった大きな古家が火事になった、今にも崩れ落ちようとしているのに、子供達は面白がって遊び呆けている。これを見た親が、早く安全な外に出て来いと叫ぶけれど、一向に子等は耳を借さず遊びに夢中になっている。そこで親は方便して、早く出よ！一番早い者に白牛車、次の者に鹿車、次の者に羊車を与えようと云う。子等はその車が欲しさに、競うて外に出た。親は子等の安全を知って、一人のこらず大白牛車を与えたのである。

又、「長者窮児の譬」には、親を捨てた長者の子がおちぶれて日庸人夫となつてさすうにいるうちに偶然にも親の家に近づく。しかし子はすでに親を忘れ、わが家とも知らずにいるが、親はよくしりつくして、色々と憐みはげましてはぐくみ、やがて長者百歳におよんで、親類縁者を集め、親子の名告りをあげ、全財産を子にすっかり譲り渡したとある。

更に「衣裏宝珠の譬」がある。うらぶれた人が昔の親友をたずね、色々と供応をうけ、酔いつぶれて眠っている時、友人に急用が出来て外出した。その時、宝珠を友人の着物裏に縫いこんで与えていた。しかしそれを知らない貧しい友は、ボロの着物をまとうて相変らずルンペン生活を続けていた。そうした時、ある知人から衣裏の宝珠を知らされて、驚喜したとある。

と、御自身の正体をそこに発見せられ、生涯、十惡の法然、愚痴の法然と慚愧されて、この者のために如来がかねて運びにえられた、選択本願の念仏を随喜していられる

親鸞聖人は恩師法然上人に導かれて「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし、とよき人の仰せをこうむりて信するほかに別の子細なきなり、……たとい法然上人にすかされまいらせて念仏して地獄におちたりとも更に後悔すべからずそうろう」と仰言る。その基盤には、いづれの行も及び難き、地獄一定の機の深信がある。これも聖人が見出されたものではなく、仏智に照らし出されて、うなずかれた御自身の慚愧の告白である。

私自身、聖人の仰せの中、ことに愚禿鈔の上下二巻の巻頭言に強く心うたれている。それは、

「賢者の信をきいて、愚禿の心をあらわす

賢者の信は、内は賢にして、外は愚なり

愚禿の心は、内は愚にして、外は賢なり」

の金言である。儒教にも「大言（大きな商人）は深く蔵して虚しきが如し」といい、ソクラテスは「我は何事も知らざることを知れり」と言っているが、これは賢者であるから自らの愚を知る人である。しかし狂人は狂人の自覚、病識がないように、底抜けの愚者の私には、外に向って賢

その他、親の留守中に毒を飲んで苦しんでいる子供達を見つけた医師である親が、解毒の薬を造って、これを早く飲めと勧めたが、子供達は飲もうとしない。そこで親は方便をめぐらし、旅に出て他国で死んだと報告させた。すると子達は親に甘える心も消えて、はじめて服薬して毒から救われた。そこへ再び親があらわれて、子達と共に無事をよろこぶという話である。

以上の譬によって、釈尊の御目に我々が如何に愚かしくまた我儘であぶない存在としてうつっているかにびっくりさせられる。維摩經には「強剛難化の衆生」と云われ、軟語粗語をもって釈尊は教護開導せられる旨が説かれている

法然上人は、觀無量壽經の中に、煩惱具足の凡夫が十惡の縁にふれて、極惡最下の生活をした者が、臨末に幸にもよき知識にあうて、弥陀の浄土に救われて行くことを説かれたところに注目されて、

「下輩の三品の人、全く大小の善根、及び世俗の善根も無く、唯十惡、破戒、五逆の罪あり」と、その有様を述べられ、而も

「この品（ほん）最も要なり、すこぶる我等が分に相当せり、」

者振ることしか出来ぬ、そこを聖人の告白において私自身を言いあてられるのである。

更に、御晩年の愚禿悲歎懷和讃に

「外儀（げぎ）のすがたはひとごとにて

賢善、精進、現ぜしむ

貪、邪偽おおきゆえ

奸詐もはし身にみてり」

と述べられ、最後の御著の自然法爾章に

「よしあしの文字をもしらぬ人はみな

まことのころなりけるを

善惡の二字知りがほは

大そらごとのかたちなり。

是非しらず 邪正もわからぬこの身にて

小慈小悲もなければども

名利に人師このむなり。」

と結ばれている。これによっていよいよ私自身の正体があきらかに照らし出されるのである。

噫！

「いずれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし」（歎異抄二章）

とはあらゆる人間の立つ原点であり、また同抄九章の

「しかるに仏かねてしろしめして、煩惱具足の凡夫（いずれの行にても生死をはなることあるべからざる）とおおせられたることなれば、他力の悲願は、かくのごとき、のわかれがためなりけりとしられて、いよいよたのしくおぼゆるなり。」

これらは、仏智照覧のわれらの実体である。聖人はこの赤裸々な自分をつねに慚愧されて

「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずればひとえに親鸞一人がためなりけり。さればそくばくの業を持ちける身にてありけるをたすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」

と、かかる智目も行足もない身を仏がかねてから知り尽くされて、大慈大悲のみこころから、善巧摂化の御手を遠い昔から縦横無尽にさしのべて下さっていることを随喜されている。

人間の原点は、自分の力で見出せるものでも、また他人の指摘で気づかされるものでもなく、一切を知り尽くされる仏の大智に照らされ、そのすみずみまでうるおして下さる大悲に催されて、はじめて地獄一定、出離無縁の、目無し足無しの身でありましたと、我が身の一切をみ仏の前に打ち出すことが出来るのである。

と　も　し　び

歎異抄読後余感

『歎異抄』の中に出ております、聖人のお言葉は金のお言葉であります。本抄は全部が金でできた言葉です。だから全部わからなければ本抄はわからないというものではないのです。本抄の何処か一ヶ所がわかってくると全体がわかってくる。金獅子と同じです。金で出来た獅子は、尾を掴まえても金なら、脚を掴まえても金です。その金のどこかがわかると全体の金がわかってくる、味わえてくる。

本抄の何処かの一点が、私の身に本当の生きたいのちとしてひびいてくるならば、そこから無尽蔵の宝がくみとられてくるのであります。そして全体が味わえてくる。だが全部を読まねばわからぬというものでもない。しかし一ヶ所が本当に読める時に全体の金の妙味がそこに汲みとることが出来る、不思議な本だと思えます

先目もある会合で「近頃青年が宗教に関心がすくないがどうしたものだろうか」という質問がでた。私は「そういうと、老人は宗教心が多いように聞こえるが、はたしてそうだろうか！ここに絶対智をもとし大慈大悲に救われる仏法には、老人はよくきける、若い者にはわかりにくいとか、老人は駄目、青年でなければというものでもない。われわれとしては求める心も信ずる心もおこらないのが本當の姿ではなからうか。だからこそ、弥陀の本願には老少善悪の人をえらばず、時処諸縁をへだてたまわず、仏願力のひとり働きで、信心を發起せしめて下さるのである」とおこたえした。

又、ある人が「自分は商人でうそを云わねば食うていけぬ、罪の深い者で、僧侶の人達とはちがう人間だが？」と云われた。そこでも私は「それなら商売をやめるとうそを云わずにすこせるだろうか。たしか香樹院師に、御講師は本當に名利のないお方でと同行が申し上げると、君方に立派に見せるところに私の偽善さが深い、と答えられた。又源通寺の禿和尚は、どうだ狸坊主の正体が見えたか」と遠くから訪ねた同行によく言われたと聞く。」言うもうそ、言わぬもうそ。世を捨つというも名利の心、世に出ずというも名利の心、造るも造らざるも自分自身が罪体である。その原点にあって本願を仰ぎ、念仏も申されるのである。

母の忌日、四十七年六月四日、稿す。

花　田　正　夫

しかし平沢興先生が仰言っておられましたが「聖人の言葉を聞いておぼえることはわけはないけれども、その言葉が自分の体験として読める、身読出来るには何十年と私はかかりました」と。

また、池山先生が還暦の年に

たのまるるただ念仏のわれにあり

さるべき業はさもあらばあれ

という一首を示され「たのみ力になって下さる阿弥陀仏のお慈悲の念仏が、私に恵まれている。この本願の念仏のたのもしさに、身に持つ一切の業は身から出た錆とうけさせていただけ」というようなことを仰言り、さらに、『歎異抄』の第七章の「念仏者は無碍の一道なり、の章全体を自分の体験として読めるようになった。ただし、天神地祇とある一句は、概念としてはわかるが、体験としては味えないがね」と迷われました。

その時また

惨憺たる悔いののこせし一一の

あとかたもなき無碍の一道

という歌も示されて、前の歌は現在から未来にかけての無碍道の味であり、これは過去から現在にかけて造った罪業のかずかずが、海水浴場のよごれを満ち潮がキレイサッパリと洗い流してくれるように、無碍光に消除せられることを述べてみた。とお聞きしています。先生が四十二歳で念仏門に歸入せられて、還暦の年を迎えて、このように七章を身読されたのであります。

『歎異抄』の言葉を体験として読み、そして生ける聖人と毎日、問いつ答えつたどらせていただき、聖人に導かれて、聖人のみ心を私自身のいのちのふかみに頂いて生かしていただき「われ生くるにあらず」という言葉もあります。「聖人われにありて生かせていただく」——これが私の本抄から導かれて行く有様であります。

(京都・高倉会館ともしび)

仏樹下に座し大光明を放つ、衆魔来るも智力をもつて降伏し、最正覚を成ず

(大無量寿經)

釈尊の城中での生活は、煩惱の追求であったが、やがてうでない。

我々は禍とか病とか死から逃れることに細心の注意をし、色々と努力しているが、力に限りのある者の悲しさにはなかなか思うようにならぬ。そこで、超人者に願いをかけて息災延命を祈り、すこしでも思うようになるとご利益をよるこぶが、そうなれぬとあれこれと迷い歩き、泣いたり怒ったり愚痴を云ったりしながら、あげくのほては絶望の淵に、唯一人ぼつちで沈まねばならぬ。

さて、よく考えてみれば、自分の不幸を除いて下さる超人者があるということも、人間が勝手にきめたことであり、また、自分の欲望を満足させるために、超人者を利用して自分の横着さも問題である。

ここに、災難とか、病氣を受け取って越えることが出来れば、随順即ち超越と水の流れるように万事を処すことができるというものだ。しかし自分の力ではとても越えることも覚束ないが、仏の本願の船に保証されて、念仏の中に波荒い海も渡ることが出来る。

良寛さんのこの言葉も、本願の船に全身心を托された上の人生百年、光悠々の信境であらう。

昭和四十七年 二月六日

それがし(親鸞) 閉眼せば賀茂河にいられて魚にあ

その空しさを自覚されて出家、六年の苦行は無尽の煩惱との闘い、律法的理想主義の貫徹であった。しかしそこにも根本的解決のないと見極められてそれを捨て、先ず身体の調制をはかられた。

かくて釈尊は菩提樹下に決死の座を定めて、正しい智慧で、あらゆる煩惱を観察したまうた。そこにあらゆる煩惱の魔はその仮面を脱がされて、正体をあらわし、はじめは荒れ狂うたけれど、やがて釈尊の真実の智見にもとづく大悲心におのずから調伏せられて、喜んで仏心に歸し、仏処を莊嚴するように転じ、人の世にやわらぎの光明が射しそめたのである。

われら煩惱具足の身も、この慈光に浴して、老少善惡のへだてなく、罪障の氷はとかされ、心の闇も破られて、何ものにも障えられぬ、彼岸への道がひらかれるのである。

四十六年 十二月十九日。

災難にあらう時はあらうがよろしく候、病む時は病むがよろしく候

(良寛書簡)

これは越後の大地震の際、見舞をうけた人への良寛さんの返事の一節である。これを文字の表面だけ読むと、何事もあきらめよという、所謂あきらめ主義にとられ易いがそ

たうべし

(改邪抄)

友人と博多の七里和上の墓参に訪づれたことがある。サゾ立派だろうと思ひこんで、広い墓地をあちこちと探したがなかなかみつからない。一休みしようとしてしゃがみこむと、そこに極く質素で小さな墓碑に「七里恒順之墓」と刻んであった。友人と思わず顔を見合わせて、私共の着眼点の間違っていたことを愧じた。

また、後年に江州の近角常観先生の墓参をした時、西源寺の境内には、釈尊随法師と刻まれた墓碑だけであった。

常音先生にお聞きすると「あの父の墓の中だ。兄は、身体も信心も父からいただいたのだから、その中へ納めよと遺言した。自分もやがて入るよ」とのことであった。

七里、近角の両師は、念仏の信心をいのちとされて、平生からの救済をよるこばれた方々で、親鸞聖人が「それがし閉眼せば賀茂河に入られて魚に与うべし」と仰言った思召しと、法然聖人が「わが亡きあと、廟所をつくるにおよばぬ、どのような辺鄙なところであらうと、念仏の声のするところが廟所である」と遺言されたおこころとも、おのずから通ずるものがある。一味の信の妙趣である。

昭和四十七年 三月十二日

あとがき

永年教育界に尽くされ、晩年当市に移られた池田和南さんが九十過ぎて亡くなられた。黙々として聞法せられた方であつた。或日「私は新潟の生れですが、悪信尼文書には新潟のなまりが一句もない。矢張り京都生れの方と息います」と語られたことは深く心にのこっている。

又近年、娘さんの死を縁として、異様な熱心さで聞法されて、京都から度々お参会下さつた西村百太郎さんが心臓病で急逝、安らかな往生であつたとお知らせをうけた。

いそげとや 浄土の旅をあしばやに

○ 八月はじめの近角常音先生の御忌日が近づきましたので御晩年の御自坊での報恩講の講話の記録を頂き、先生の信味に浴させていただきます。今は亡き大字三右エ門さんの労を謝しながら。

山本晋道師の「浄土の慈悲」は、人間の愛の限界と、そこに注がれる仏陀の大慈悲の働きを、歎異抄四章を引用されて詳しく懇切に説いて下さっている。すべて自分の力の限界にも気づかず、或は人を責め、或は自身が絶望の淵に沈む。そうしたところとたわごとまことあることなき世に火中の蓮の不思議を強く教えらるる。

信国精一さんが大病続きの中に、健康の

時には味うことの出来ぬ、深く篤い仏心を渴仰された記録の一端を頂きました。私共は、頭では色々の人生の悲惨さも想像出来るけれど、実際にその渦中に立つた時とは大変に相違するもので、そこに人々の生活記録は貴重な人生の枝折と思う。

木村さんは動脈硬化で耳なりがやまず、又身体故障もあり、病院通いとのこと。この不順の梅雨期を用心して貰いたいことです。

「人間の原点を求めて」の題は、名古屋の東別院の八月の黎明講座に、話題の中心にしてくれとのこと、心に浮ぶままを書きました。「ともしび」は、中日新聞と、高倉会館の会報にのつたものを再録しました。御判読下さい。

○ 六月十九日に、私の宿病の定期検診をうけ、無事とのこと、たまゆらのやすらぎにホッとしております。宿病のお陰で、文字のあることのありがたさが知れ、小冊子が続かせて頂いた二十四年になりました。それといえますのも多くの信の友と御交遊を頂き、そして浄土の伴侶となつて頂きたいとの願いが、師友の皆様の御念力に支えられてきました結果で、御礼の言葉もありません。

御案内

○ 八月の日曜の例会は休ませて頂きます。

○ 毎月二十四日、午前・午後。

昭和区小椋町、教西寺、法話会。

市電御器所通下車。

市バス北山下車。

定価 半年 四〇〇 円(送共)
一年 八〇〇 円(送共)

名古屋市南区駈上町二ノ八八
編集・発行人 花田 正夫

電話八二一〇七〇三七番

愛知県西加茂郡三好町大字福谷
印刷 人 吉野穂志郎

名古屋市南区駈上町三ノ八八

発行所 慈光社

振替口座 名古屋 一〇四七〇番

郵便番号 四五七